

「生活」史研究の方法と環境

A・コルバンの射程とデジタルアーカイブ

水島久光

“Life” History Research Methods and Environment

Alain Corbin and Digital Archives

MIZUSHIMA Hisamitsu

Abstract

This paper describes the role of Digital Archives as historical materials, and attempts to use them and theoretically support the construction of the research environment in accordance with the tradition of humanities. I picked up Alain Corbin, who belongs to the third generation of the French "Annales School". A systematic composition that captures his history, the concepts of "landscape" and "life", the methods used in the two books "Le Territoire du Vide" and "Le Monde Retrouvé de Louis-François Pinagot" were analyzed, and we considered using it for Digital Archives environment.

0. 問題の設定——デジタルアーカイブ研究における「方法」の不在

ここ四半世紀でデジタルデータによる記録保存技術はすっかり社会インフラのポジションを獲得した。しかしそれがいったい我々「人間」という存在にとってどのような意味をもつのかは、未だ十分説明されているとは言えない。工学的・経営学的な観点からの効用は数多く語られているが、人文学領域における意義は、流行の「デジタルヒューマニティーズ」の看板をくぐったところで、いまのところ手段の域を超える思想に残念ながら出会うことはできない。

デジタル技術の本質は離散性にある。これまでの多くの技術論がその大前提を踏まえることなく矢継ぎ早に現れる未曾有の出来事に追われ、その中で近代的思惟の基準は揺るがされ、結果人文学は実践との乖離の中に落ち込み、出口を失ってしまっている。本稿ではこの動向に対し、フランス『アナル学派』の研究成果を参照し、救出の補助線を引くことを試みる。1929年に芽生えたこの「新しい歴史学」による学際的統合を志向する運動は、今日に至るまで多彩な関心を巻き込んできた。集った研究者たちは、硬直化した実証主義の超克を志向する点については共有していたものの、体系づけられた主題や理論が予め明示されていたわけではない

め、思想的には「サロン」に過ぎなかったと評価もある。しかしその中には、21世紀社会の情報の裁断と再結合を繰り返すデジタル記号現象の特徴、そのランダム性を的確に記述する態度の萌芽を見出すことができる。そのエッセンスを現代の思想的混迷状況の打破にいかにか適切につなぐことができるのか、少々大胆な思考実験を提起してみたい。

i 書かれざるものへの着目

いまからちょうど100年と少し前——人文学の一大転換点としての20世紀最初の四半世紀。それはひとりで表すなら、「見えないもの」(あるいは「自分ひとりにしか見えないもの」)が次々と視覚化され、共有化されはじめた時代だった——映画の発明と普及がまずその転機になった。

リュミエール兄弟の初期の作品群(『工場の出口』『ラ・シオタ駅の列車到着』など)は、一般には「アトラクション」の感覚を呼び覚ましたものとして語り継がれているが¹、その社会的インパクトは、その映像に「驚く人々」を可視化したことにある。ホームに入ってくる列車に思わず飛び避ける無意識に気づき、周囲に向かって照れ笑いをする。その体験は、私たちの「見る行為」の二重性(対象に見入る/見入る自分を感じる)の意識化に繋がるものだった。

フロイトの「無意識」の発見や、ベルクソンの「時間」「動き」あるいは物質的なモノに対する注目は、近代的自我に支えられた「人間」という外殻の脆弱さを暴露した。ほぼ同時期に、ソシュールやパースの記号現象への関心が重なったのは、そうした知覚環境のコペルニクスの転回が再び起こっていたことの証である。彼らを嚆矢とする「言語」を手掛かりとするアプローチは、やがて文化人類学などの誕生を介して西欧中心主義を打ち破り、また言語概念自体を拡張し、コンピュータに論理的思考を委ねるまでに「知」のテリトリーを広げるに至った。

しかしそれは残念ながら「書かれた」言語による「知」の独占を手放すところまでは至らなかった。濫造されるポスト・モダン言説は、後期資本主義による「知」の収奪に敗北し、翻って「知」への信頼の失墜(反知性主義)への土壌を形成するようになった。そしてMacとWindowsによる両面作戦によって、我々の「思考」はインタラクティブ(inter-active: 行為を結ぶ行為)の挟間に反転し回収されるようになり、現在に至る。

ii 表象の集合性を読む——「風景」論を手掛かりに

フーコー、そして彼の死後はアガンベンが主題として挑んだ「生政治」の問題が、21世紀の世界においていかにアクチュアルな課題であるかは、この四半世紀の「言語」が「情報」に、「世界」が「デジタル環境」に置き換えられていくプロセスを辿れば誰でも実感できるだろう。問題は、こうした「理性の臨界」ともいえる事態を、改めて理論としていかにして扱うことができるかである。このパラドキシカルな物言いが図らずも表してしまっているように、それは「理論」の科学主義的言明そのものが、再帰性の中に飲み込まれていく運動記述を求めるものに他ならない。

筆者は、これまで映像アーカイブの分析を通じてその問題の所在に気づき、とりわけ地域表象に大量に向き合うという実践を介して、手探りでそのプロセスに欠くべからざる要素や配慮について検討を重ねてきた。特に炭鉱の閉山から財政破綻に至る北海道夕張市における産業基

盤の喪失と、東日本大震災の津波被害でそれまでの社会機能との連続性を断たれるに至った宮城県・岩手県の沿岸地域をフィールドとした、およそ10年に亘るこれらの対象との関わりは、まさに筆者に「被写体の視線を体験し、そこに映る空間に入り込む記述（言語化）」の必要性を迫るものであった²。

その後も、地域と映像とアーカイブに関わる研究者・実践者との数々の連携を深めていく中で、筆者は、それが重要な認識論的課題を有することを確認していくことができた³。その基点となる命題が、「表象を集的存在として捉えること」である⁴。アーカイブに集積される素材群として表象を扱うその行為自体が、「生きられる世界」（実時空間）との写像関係を担保するという発見は、再帰的運動の中における認識主体の半自律性に根差した記述の有効性を裏づけるものであり、また様々なメディアに内在する（合意を志向する）コミュニケーションの非対称性を中和する可能性を示唆するものであった⁵。

しかし、これらの「発見」は残念ながら、IT用語的に言えばスクラッチで積み上げた「我流」の表明に過ぎず、理論を志向しながらも、そのボキャブラリーはアカデミックなステージにおいて共有されうるには客観性に乏しいものと言わざるを得ない。確かに狭義の科学主義の超克を目指すものとは言え、そのナイーブな拒否と受けとられてしまっただけでは、とても「知」の発展に寄与することなどできない——そこで本稿では、敢えて一旦従来型の作法に則り、その学説史上の有効性を示す手続きを採る。

1. 雑誌『アナル』の系譜とA.コルバンのポジション

iii 心性史の再構成——リュシアン・フェーブルからアラン・コルバンへ

デジタルアーカイブを支える理論として、メディア論を経由するかたちで『アナル』学派の論者の仕事に期待する声は以前からあった⁶。しかしそれは所謂「社会史」といわれるアプローチの草分けという思想史上の位置づけに依拠するものにすぎず、その方法論に裏づけられたものではなかった。既に述べたように、雑誌『アナル』に集った人々は多様である。「新しい歴史学」を求め、編年体を排し、「学際性」を志向するというひと言で括ることはできても、むしろこの雑誌はそのための様々なアプローチのトライアルの場であったと言え、今日に続く長い道のりにおいても、方法論的収斂を謂うことは困難である。

それでも、1970年代後半の「歴史学の危機」以降は、『アナル』自体が自身の散漫さに対して自覚的に振舞う動きがみられるようになった。特に『アナル』1986年6号の特集「批判的転回」においてははっきり示された、このグループの精神的支柱であった創刊者のリュシアン・フェーブルとマルク・ブロックの二人、あるいはフェーブルの死後その仕事を引き継いだフェルナン・ブローデルとのパースペクティブの違いに検証の目が差し向けられたことが大きい⁷。それまでこの学派の叙述の骨格をなしていた「構造の歴史」「数量的研究」「心性の歴史」の三つの柱のうち、ブロックやブローデルが主に関心を傾けていた集団的表象や経済史的領域の扱い、あるいは「長期持続」という巨視的概念に再考の目が向けられたのは、「言語論的転回」勢力から歴史学そのものに突きつけられた、叙述の「物語的性向」に対する妥当性の検証が避け

られなくなったからだ。

しかしアラン・コルバンはその「危機」を、フェーブルの「生きた個人を土台」とする思想に回帰し、歴史学の可能性を再び拓くチャンスと捉えた。1992年に著した小論「めくるめく輻輳——名前なき歴史を素描的に展望する」においてコルバンは、「リュシアン・フェーブルの矚みに倣って」との見出しを携え、フェーブルの意志が継承されてこなかった過去を嘆き、愚直にその「感性の歴史（感情生活の歴史）」の企図を辿ろうとする⁸。そしてそこで明らかにされたのが、フェーブルが心理の集合性を複数のシステムの輻輳として記述すべしとしていた点、そしてそのためには何らかの「規範的な態度」に従属するのではなく、その「対象の不確かさ」「名づけることの不確かさ」という「乗り越え難い障害」（p.548）に誠実かつ謙虚に向き合う必要があるとした点である。

この控えめな態度を、コルバンは「歴史の作法のいろいろ *manières de faire* を簡単な目録にまとめてみる」（p.550）こと、あるいは「過去の世紀のそれぞれにぞくする人間たちがどんな『精神的用具 *matériel mental*』を持っていたかを調べ、リストアップすること」（p.554）と言う。そしてこうしたデュルケム社会学を彷彿とさせるアプローチによって「特定の時代がえがきだす思考の可能性の範囲と経験可能性の範囲を、えがきだされるままに画定してみることに、これがつまるところ研究の最終目標となる」（p.554）と今度は一転積極的に言明する。あるインタビューでコルバンは「（フェーブルは）使えそうなものを見つけるためには、歴史家はいわば捕食者のように人文諸科学のテリトリーの上空を飛行しなければならない」（フランドロワ編⁹、p.278）と言っているが¹⁰、それはまさにこの目録作り＝リストアップのためであり、それこそが、フェーブルが目指した「問題提起の歴史」（フェーブル『歴史のための闘い』、p.83）の方法だ、ということになる。

iv カテゴリーの設定と構成素の記述

そうなるここでいう（目録の対象となるべき）「精神的用具」とは何か、という点が問題になろう。そこでは「批判的転回」以降、特に重要視された二つの概念——「表象」と「分析のレベル（日常や個人への注目）」が手掛かりとなる。これらの概念が含意する媒介性が、ミクロな振舞いが社会史として記述されるエンジンとなっていることに対して傾注することの方法的不可避性を担保し、かつ利用すべき史料（資料）の範囲を拡大させたのである¹¹。

コルバンはこの点について、「めくるめく輻輳」では次のように言及している。まず「表象」については、「社会的イメージの世界に捧げられた理論的著作とすべての業績、社会的イメージの世界という観点から現在行われている政治史の読み直し、こうしたものが一丸となって先ほど触れたこと（表象の歴史から出発しなくてはならない；筆者補足）を思い出させてくれる」と言う（p.572）。「日常」「個人」の観点については「とくに価値のある原史料として、家事日記、信仰日記、旅行日記、療養日記、私的な日記、記念帳、備忘録などの自己記述、もっと一般的な史料として、内省や告白などの手順にかかわる文献がそろっている。ほかに、手紙、自伝、とりわけごく普通のひとびとの自伝がある」と列挙する（p.580）。こうした二次資料の扱いや、さらには所謂公文書のカテゴリーだけを頼りにしては目の届かない、「見えないも

の」への関心が、コルバンの方法論をささえていた点は重要である。

そもそもコルバンは、一般に「感性の歴史家」と呼ばれているが、単に多作であるだけでなく、その題材が多岐にわたっていることで知られている。しかしこのような言明を辿っていくと、一見多方面に散っているように見える彼の関心が、実はその方法論に従った星座的布置（constellation）を形成していることがわかってくる。大きく分けると彼の著作の主題は、認識と思考を支えるシステム（現象形態）とその構成素に分類することができる。「風景」はその代表的な集合的概念であり、「音」「におい」「快楽」「恐怖」「沈黙」といった感覚要素が、それを構成するものとしてクローズアップされる。それらは「風景」あるいは「村」などの時空間的まとまりに事象を包摂するフレームに対置、あるいは取り込まれるものとされ、遡及的に「人間」というもう一方の極が措定される。人間もまたその多くの場合、職業的あるいは集合的に描かれる（「娼婦」「英雄」「木靴職人」など）も、その基点はあくまで個人にあり、「精神的用具」を多様に備えた集合体（意味の塊）として描かれる。

ここに対照されるシステムと構成素の関係が、コルバンの各著作には入れ子的に編み込まれている。それは映像が対象を捉えるときのカメラワークと編集の関係に喩えることができよう。つまりコルバンの研究の題材群は範列的に広げられたものではなく、それ自体がネットワーク的な再帰構造を有しているのだ。そして「表象」と「個人」への眼差しこそが、個々の構成素をつなぐ役割を担う。そして「表象」自体に秩序立てられた「五感のヒエラルキー」（「めくるめく輻輳」p. 573）が、「個人」の知覚を規制し、「行動様式を規定するようになる」（p. 582）。そしてそれが再び「表象」に読まれうるものとして織り込まれる——ここまで言えば、コルバンが丁寧に解説していることは、メディア論的なダイナミズムであることがわかるだろう。

残念ながら、コルバンの主たる関心は、18世紀～19世紀の、近世から近代に社会が編成されていく過程にあり、そこには今日的な意味でのメディアは表れてこない。しかし彼の代表的なシステム・カテゴリーである「風景」は、十分にその機能を備えたものとして措定されている——「風景というものはイメージの送像機であり、風景から送り出されるイメージ群を利用すれば、意識的な領域から無意識的な領域へと滑らかに移りゆくことができる。また場所—分析（トポ—アナリズ）からは、感受性の反応をひき起こすさまざまなシンボルがうみださされる」（『浜辺の誕生』p. 544「方法をめぐるノート」）。

2. 書かれざるものと資料（史料）との関係

v 表象のシステム／評価のシステム

コルバンにとって「風景」は、様々な領域に関心を広げている彼の仕事を「束ねる」役割を果たしている概念である¹²。すなわち、そのフレームはものごとに意味解釈をもたらすものとして働く。そうした機能の総体を彼はしばしばシステムと呼ぶが、彼の歴史学を成立させるための重要な道具立て（メタ次元の「精神的用具」）の一つであるといえよう。しかしコルバンは「風景」の理論家ではない。その点においては、同様に「風景」に関して多くの著作をもつ地理学者オギュスタン・ベルクと比較しておくことは意味があるだろう。

和辻哲郎の『風土』を *écoumène* の意味に当て通態的に環境を捉える概念として措定したベルクは、風景をその自己言及的な形成原理として考えている——「風景は風土<エクメーネ>的な動機<モチーフ>であり、それに固有な要素 (lgS) とその表象 (lgP) で構成される」(『風土学序説』p. 281)¹³——ともに学際的に、他の研究領域からの援用を積極的に行いつつ、二項間におけるダイナミックな動態の中にこの概念を位置づけているが、それを具体的に寄せて存在論的に捉えるベルクに対し、コルバンは認識論的に扱おうとする。そのあたりが彼をして「感性の歴史家」と言わしめている所以であろう。あくまで主題は「こころ」の方にある。

歴史家の仕事は、運動と、それが現れる関係性を記述していくことである。この命題をフェーブルから継承したコルバンは、それを諸システムの相克として表そうとする。その中でも「表象システム」と「評価システム」との間に生じるダイナミズムに特に彼は注目した——「風景」はその後者の側の主要カテゴリーといえる。「風景とは、必要とあらば感覚的な把握の及ばぬところで空間を読み解き、分析し、それを表象するひとつのやり方、そして美的評価に供するために風景を図式化し、さまざまな意味と情動を付与するひとつのやり方なのです。要するに風景とは解釈であり、空間を見つめる人間と不可分なのです」(『風景と人間』p. 10-11)。

コルバンは、時代によって変化する「風景」の認識、すなわち「空間の解釈」を探求するために、その空間を構成する対象に注がれる感覚(視覚に止まらない——むしろコルバンは、聴覚や嗅覚の対象を重視する)の再構成を試みる。そこにおいて表象(例えば絵画)は、その感覚にアプローチする重要な資料に位置づけられる。しかしそこに全てが含まれてるとは考えない。逆にそこから零れ落ちているものを指し示すネガと捉え、欠けたピースを埋めるための痕跡を、あらゆる可能的な資料(実地踏査や自らの身体感覚も含め)を渉猟し求めるのである。

この探究過程における見えないもの、書かれざる(描かれざる)ものへ注目こそが、コルバンの方法の核心であるといえよう——「いずれにせよあらゆる歴史と同様に風景の歴史も、専門家たちは絵に描かれた、あるいは文字で書かれた痕跡に依拠して研究を進め、言われていないことや書かれていないことは感じられなかったことと等しいと想定する、という事実によって限定されています。ところが人間は多様な情動や感情を表現する手段がなくても、あるいはあまりに平凡なので表現したいと思わなくても、そうした情動や感情を感じとることはできるのです」(p. 18)——こうした取るに足りない感覚の欠片、その集積によって成り立つ空間と人間の日常的な関係、それこそが「風景」の名のもとにコルバンが抽出したかったものである。それをここでは暫定的に「生活」と名づけることにする¹⁴。

vi 「生活」を抽出する実践

コルバンのシステムイメージは、さらに上位の概念(社会)の中であるときは対立し、また相互に媒介・干渉しあう要素をもって構造をなす集合体といえよう。本稿で特に注目する「表象」と「評価」両システムのその動態については、コルバンは拡張した資料群の再構成を通じて、具体的な対象を浮かび上がらせるという実践的記述を試みている。ここではその例を二つ上げ、そこにいかなるものとして「書かれざる(描かれざる)」対象の姿(ここでは「生活」)を見出していったかを簡単に辿ってみたい。

ケース1 「浜辺」をめぐる二つのシステム（『浜辺の誕生』より）

『浜辺の誕生』は、多作で知られるコルバンの中でもおそらく最もボリュームのある作品の一つである。邦訳の序文において言う——「海水や浜砂に体で触れてみたいという欲望が消えたままかくも長い月日が流れてのち、なぜ西欧の人間たちは自然をかたちづくる四大（水、土、空気、熱）が接するあの領域（テリトリー）に一改めて一魅惑を感じはじめたのか」（p.2）。本書を貫くこの問いに、日本語を用いて思考する我々は、まずもって強い違和感を覚えるだろう。この問いの前提をなす西欧人の「海」に対する余所余所しきや畏怖は、我々の無意識的な了解には届かないところにあるものである。

そもそも、本書の原題として『LE TERRITOIRE DU VIDE（空虚のテリトリー：領域）』が選ばれたことに驚く。「海」の豊穡は西欧人にとっては自明ではなく、そこは（特にコルバンが主たる関心を傾けた18～19世紀においては）、新たなイメージが埋め込まれるべき空白地帯であったのだ。従って、本書の文脈は一貫して「海」に注がれる他者の目を中心に「再構成」されていく——ツーリズムと旅行者の誕生、そして彼らが「表象」する絵画や文学が、どのようにしてロマン主義と港の活気、そして保養という価値観と接続し、次第に「リゾート」としての社会空間が実態として整備されていく——彼は、その痕跡を時系列で積み上げていく。

圧倒的な筆力に引き込まれながらも、徐々に当初の違和感の正体が見えてくる。外部者からの眼差しではなく、もともとそこに住む人々の空間認識はどうなっているのか。コルバンは「海岸の民」の存在を決して忘れていないわけではない。しかし彼らの心性は、彼ら自身のものとしては記録に残っておらず、まずは特定の環境に含まれる「描かれた（書かれた）」対象として現れるのである。最初は実態調査の対象として。そしてやがてそれは旅行記や田園詩的叙述の中に（第二章）。「海岸の民にむけられたまなざしは、変容を遂げるなか、やがて、風景に目をとめる旅行者のまなざしと絡み合う。このふたつのまなざしからさまざまなイメージ、図式、行動様式がうみだされ、それらはたがいに重なりあい、いれ替わり、結ばれあう」（p.415）

その中で「海岸の民」はどう位置付けられるのか——それは、旅行者の前で「語り部」として、「空間に結びついたさまざまな物語」をもって「海岸という領域の定まりのない空漠としたありさま」を埋める存在として位置づけられるのである（p.428）。このあたりの記述は、「風景」というフレームの中で、築き上げられる日常＝「生活」のダイナミズムをよく表現している。それは端的に言えば「砂丘と海のはざままで社交の端緒をなす人的結合が再編され」（p.541）ていくプロセスなのである。

ケース2 ルイ＝フランソワ・ピナゴとベレームの森

言い換えれば「その場所に住まう民」には、もともとは俯瞰の空間認識は存在せず（むしろ時間によって秩序づけられていた）¹⁵、それは他者との人的交流の中において形づくられていくもの見なされた。そのことについて、それまでの歴史の方法を逆転させる実験的なアプローチによって確認していった仕事は『記録を残さなかった男の歴史；ある木靴職人の世界…1798-1876』である——「個人として、一度たりとも記述の対象になったことのない人間、ひとこと

と言えば、戸籍簿上の表記以外に、何も残さずに消え去った人々の大半について、何を知ることができるのか」(p.2)——この問いは、「生活」という対象の抽出のアポリアをそのまま隠さず表明している。

コルバンはそれに実に愚直な方法で挑戦する。「バラバラの断片からパズルを組み立てる」(p.12)、すなわち複数の記録に偶然現れた特定の人物の痕跡を想像力によってつなぎあわせる作業を重ねることである。その人物は誰でもいいというわけではない。まず「古文書館の『文献カード』にも入っていない」自治体(＝可視性の欠如した)を選ぶ。そして偶然に身を任せる。その結果二人の候補が上がる。彼はより長生きしたほうを選ぶ——そうでなければ「このゲームのおもしろい部分はすべて失われてしまうことになる」(p.17)。

こうした名もない個人にフォーカスを当てるアプローチは、同時期にやはり「新しい歴史学」として注目を集めたギンズブルグの「ミクロストリア」としばしば比較されるが、コルバンは自らの目論見がそれとは異なることをはっきりと言う。ギンズブルグが粉ひき職人に対する異端尋問を掘り下げたのは、個人に内在する精神世界を徹視的に描き出すことにあった¹⁶。それに対しコルバンは「取るに足りないような痕跡はめこみ、選び出した個人を確実に取りまいていたものを全て描き出すこと」(p.14)を目的とする。すなわち彼の外に広がる時空間全体(システム)の捕捉を目論むのである。

従って選ばれた男(ルイ＝フランソワ・ピナゴ)は、あくまで「道具立て」の一つにすぎない。とはいえ、他の様々な要素との関連性(リンク)を可視化させるための基点となる極めて有力な「道具」なのである。『浜辺の誕生』においては、客体としてアプローチするしかなかった「その場所に住まう民」がここでは名前を持った主役となる。そして戸籍に謳われた微かな痕跡が、その「普通」のありようを描き出す「暗示」の手がかり、情報のノードとして働きだす——「それは森に生きる人で、運搬業者の息子、赤貧の木靴職人で、ベレームの国有林のはずれに住んでいた。私はすでに、彼の身長(1メートル66)、彼が生活していた場所、結婚していたかどうか……を知っている」(p.18)。

注目すべきはその「事実」と結びつけられる情報である。ピナゴが生きたベレームの森は、革命後の荒廃につづき、開発と森林資源の再整備が押し寄せる。木靴づくりを生業とする男はその「風景の変化」の中を生きる。それは単に経済的な側面に止まらず、この地域の公文書に正確に記録された、信仰やコミュニティの行事など文化的なことがらを含むあらゆる変化との関係性を想起させる——「ベレームの森の中では、孤独と社交、静けさと喧噪が相対している。土地を十分明瞭に整備し、芸術的にさえし、人間的に開化することと、森の境界で自己主張をしてきた野生の動物性の名残りとが対立するのである。なんといっても森の境界は、あらゆる種類の相互浸透が常に可能な場なのである」(p.33-34)。

ここにおいて「浜辺」と「森」といったテリトリーが「風景」として立ち上がり、「普通の生活」が表象／認識される場として見事に対象づけられる。それとともに我々は、こうしたアプローチによって記述される「生活」が決して人類史において普遍的に存在していたわけではなく、近代社会が生み出したという意味で歴史的に特殊な概念であるということを知るのである。

3. デジタルアーカイブの資料（史料）性の根拠

vii 「社会的表象」と「社会的想像力」の界面

さて、ここまで本稿ではアラン・コルバンの仕事のうち、特に「風景」と「生活」という概念に関係する著作に注目し、そのアプローチを支える方法の革新性について論じてきた。ここから先は、それが『アナル』が目指した歴史学という伝統的ディシプリンの改革に止まらず、デジタルアーカイブという新しいメディア環境における認識の理論として、その効用を広げる可能性について述べていきたい。

先に挙げたように、コルバンの仕事に用いられた史料（資料）は、比較的オーソドックスなものであった。『浜辺の誕生』は文学やさまざまな既存の研究書そして図版が、『記録を残さなかった男の歴史では』特に公文書館に所蔵された資料がベースをなしている。しかしそれらはあくまでネガであり、そこで「暗示」されるさまざまな「解釈」は基本的に「書かれたもの（表象）—書かれざるもの（評価）」の対称性の中に置かれる。デジタルアーカイブも、「アーカイブ」の拡張語である以上、その範列にあってしかるべきである。問題は、この対称性にある。我々はそれに差し向ける現代の「評価システム」について、この両書でコルバンが用いた方法、特に「風景」と「生活」の関係が適用可能であるかを検証しなければならない。

1993年1月の来日の折に開催されたセミナー「歴史・社会的表象・文学」（『時間・欲望・恐怖』に所収）でコルバンは、それについて若干の手がかりを述べている。コルバンはセミナーの質問における「社会的表象」と「社会的想像力」の対置に応える文脈で、組織化されていない断片的な原資料を（として）表象を読む——その対象群に、アルフレット・ファルジュという女性の歴史家が用いた意味で「アルシーヴ（アーカイブ）」の名をあてる（『時間・欲望・恐怖』p.341）。アルシーヴは「同質の表象システムをもった人たちによって書かれたもの」の集積を言うが、歴史家の分析には、いかに異質なシステム間を横断して、それを組織化し解釈を施すかという困難な課題が求められるとコルバンは言う。このあたりはフーコーのアルシーヴ概念（「諸言表の形成およびその変換に関わるシステム（『知の考古学』）」とも重なるところである（コルバンは「めくるめく輻輳」においても、積極的にフーコーを評価している）。

その分析の対象となるものに充てた一般概念が「社会的表象」である。このセミナーでコルバンは、この概念に対して「社会的想像力」という質問者（山田登世子）の言葉を接するように、わざと境界を曖昧にして用いている（p.335）。この応答を積極的に受け取るならば、この「表象」と「想像力」の界面にあるものを捉えることがまさに歴史家の仕事である、ということになる。

このセミナーでコルバンは、「社会的表象」について、三つの水準から定義を与える。

まずその「5つの要素」について。

1. 科学的な信念
 2. 宗教的な信念
 3. 感情生活の構造
 4. 私的な体験に根差したものの
 5. 各個人の社会的な状況
- (p.336)

続いて、「3つの分析の段階」の区別

1. 社会的表象の生産
 2. 社会的表象の流布
 3. 社会的表象の作用形態
- (p.338)

最後に、分析に際して踏まえるべき「4つの手続き」

1. いろいろな領域の社会的表象の内容を分析する 2. (それらの)形成の条件を探る 3. その一貫性を支える(システムとして成立させている)原理を見つけ出す 4. 社会的表象が定着していく様態(どのように内面化され組み込まれていくか=根づき方)を分析する (p.339-340)

ここで示された見解を、先のアルシーヴ(アーカイブ)の位置づけと重ねて考えると、まさに彼が苦労して資料をかき集め、再構成を試みる「道具立て」の集合体こそがそれであり、その探究のためには、掲げた三つの水準に従って解釈の可能性を高める条件をそこに整えること(「評価システム」環境の確立)が、これからの歴史学には必要だ、ということになる。

viii デジタルアーカイブの歴史的な意義とメタデータの果たすべき役割

『記録を残さなかった男の歴史』の作業が行われたのが、このセミナーの二年半後(そのことを書き留めたコルバン自身の「調査の最初の数日間」の日記の日付は1995年5月2日(p.15))であることを考えると、そのロジカルな言明と行った実践との連続性を確認することができる。1990年代に始まるデジタルアーカイブの胎動が、まさにその表象の新たなプラットフォームとして可視化され、その対象が技術の力を借りて視聴覚資料や草の根のコレクション、あるいはソーシャルメディアにオートマティックに記録されるログにまで広がっていったこの四半世紀は、「書かれざる(描かれざる)ことがら」「評価システム」を探求するコルバンの掲げた歴史家の使命を、叶える環境の形成・生産プロセスだったように思えてくる。

しかし残念ながら、新興学術分野を気取るデジタルアーカイブ「界限」には、そういった意識はまったくと言っていいほど感じられない¹⁷。先に述べたように「アーカイブ(アルシーヴ)」そのものが「同質の表象システムによって書かれたもの」の謂いであるならば、今日のデジタルアーカイブの実体、あるいはそれに対する諸言説自体も、自己言及的に分析されるべき原資料の塊なのかもしれない。とするならば、そこに見出される「万能感に支えられた汎記号主義」こそが、いま(近代初期に向けられたコルバンの関心とは異なり、「メディア」という超現代史的課題を背負った)我々が、コルバンの方法をもって向き合うべき「社会的表象」そのものであるといえよう。

但しデジタル技術に触れる我々の態度は、あくまでアンビヴァレントである。例え無意識であったとしても、表象がシステムを成して各々が我々に促す作法は、馴染むに従ってその意味を忘却させる側面を持つ一方で、距離を置いて見ることで解釈のトリガーともなりうるのだ。そもそも『アナル』の創刊者・フェーブルは、歴史を時間の問題に、地理を空間の問題に還元して考えることを提案した(『歴史のための闘い』、p.75)。それを手掛かりにするならば、デジタルアーカイブという「表象システム」の時空間は、「検索」をキーに各々の記録・痕跡・断片が任意に結びつくメカニズムを基礎としていることに気づく。

そうなると、コルバンがピナゴを発見し、そこから丁寧に公文書における彼の痕跡を追ったパズルの「再構成」作業は、今日のデジタルアーカイブ環境においてはメタデータによって支えられるということができるだろう。デジタルアーカイブに関わる議論で常に核心の位置にあ

る「標準化」の志向は、そのシステムとしての成立要件となる「一貫性」と重なるだけでなく、それをシステムの自律に委ねることなく、解釈のベースをなす「評価システム」との界面として機能することを想定している点において重要である。

現在のところ、そのメタデータ標準化の議論は、ダブリンコアを基本に展開されている¹⁸。極めて合理的かつ単純に整理されたその15項目は、しかし本稿におけるこれまでの推論を踏まえるならば各アーカイブ（アルシーヴ）それぞれの「表象システム」としての違いが考慮されていないことが課題として見えてくる。特に、Subject（キーワード）、Description（内容記述）の語彙のばらつきは大きく、アーカイブ連携を妨げ運用者の負担となっている。

「表象のシステム」の観点から言えば、こうしたボキャブラリーの問題は「評価システム」のありようを規定するものであり、特に個別資料に関わる主体(Publisher, Contributor, Source, Relation, Coverage)の定義を、コルバンが求めたように「再構成」の素材たる「用途」イメージを明確にしたうえで、記述方法のガイドラインが施される必要があるが、現段階では全くそれはなされていない。しかし、このダブリンコアの各項目の関係をあらかじめ資料に関わる主体の働きから俯瞰してみると、これ自体が「表象のシステム」と「評価のシステム」の界面になり、そこに生まれる意味を沸き立たせうことが示唆されている。それはこの15項目が、ソシユールのなサンタグムとパラディグムの関係性を表すだけでなく、パース的な記号の動態をも示しうる可能性をもっていることがわかってきたからである¹⁹。このあたりの精緻化が具体的な課題となっていくだろう。

4. A. コルバンの顰に倣う

こうしてデジタルアーカイブを一つの「表象システム」でありかつ、「評価システム」との界面をなす環境として捉えたとき、そこにコルバンがこだわった「風景」という概念に、今日もなお注目すべき意味が見えてくるだろう。近代の黎明を対象に定めたコルバンの著作において「風景」は、数々の「書かれたもの（描かれたもの）」を介して「そこに住まう民」と旅行者や経済的介入者などの「外部者」の眼差しの交わりを示すものとして表出された。そのシステムがその後どのような変化を辿ったかについて、その表象の位置にメディア的なものを代入して考えることは、既に述べてきたようにあながち無理があるとは言えないだろう。

特にパノラマ写真から映画、そしてラジオ・テレビと連なっていく19世紀後半から20世紀中盤に至る視聴覚空間の展開は、その技術的フレームが切り取る世界の縁の広がりを持って、ナショナル～グローバルのリアルに人々を晒すに至った。それはさながらピナゴが同じベレームの森に暮らしながらも、その「生活」を変化させていったプロセスに対応する。我々はいま、同じように家庭のリビングにいながらも、ワイド画面化した4K映像を背景にスマートフォンをいじり続ける時空間に暮らししている。そこにおいて未だ「風景は機能しているのか」という問いを立てることは十分可能だ。

「メディア」という表象のシステムの解釈に、「風景」という評価のシステムを宛がうということによって、「生活」という「書かれざる（描かれざるもの）」を焙り出すアプローチは、近

代という時代区分の入口と出口を指し示すという作業なのだと言い切ることがどこまで可能なのかはわからない。しかし「失われた生活」を主題として、炭鉱という産業基盤を失った町や、津波が押し流した港町の船の生態系の「風景」を、それこそテレビ時代の黄昏を介して観測しつづけてきた筆者は、コルバンがフェーブルに対してそうしたように、その響に倣ってみたいと考えている。但し、その仕事場は公文書館ではなく、デジタルアーカイブという半バーチャルな環境において、ということになるわけだが。

註

- 1 トム・ガニング「驚きの美学：初期映画と軽々しく信じ込む（ことのない）観客」『「新」映画理論 集成①歴史／人種／ジェンダー』、フィルムアート社、1998年、p.111
- 2 「テレビ番組における風景の位相—映像アーカイブと日常の亡失に関する一考察」前後編、『東海大学紀要文学部』第96、97輯、2011-12 参照。本稿はある意味、手薄だった理論部分の補強に取り組む上記論文の続編ともいえる。
- 3 アーカイブ体験、「群」としての認識、など。「ソーシャル・デザインとしてのデジタルアーカイブ」、原田・水島編『手と足と眼と耳—地域と映像アーカイブをめぐる実践と研究』学文社、2018 参照。
- 4 「テレビと集会的記憶のメカニズム—メディアと「過去」の位置づけに関する学際的探究の試み」『東海大学紀要文学部』第99輯、2013 参照。この時点では「テレビ」という対象、「過去」という時制に限った検討に止まっていた。
- 5 戦後75年間「棚上げ」されつづけた社会的合意に光を当てた拙著『戦争をいかに語り継ぐか—「映像」と「証言」から考える戦後史』はこの点を主題としている。
- 6 モーリス・アルヴァクスの「集会的記憶」やフェルナン・ブローデルの「長波の時間」などの概念が、バズ・ワード的に扱われてきたことがよく知られている
- 7 この経緯はジャン＝イヴ・グルニエ「1980年以降の『アナル』と歴史叙述」（叢書『アナル 1929-2010』第五巻序文、藤原書店、2017）に詳しい。
- 8 この重要な論文が大著『浜辺の誕生』の翻訳版に収められたいきさつは、その訳者あとがきに詳しいが、そのこと自体が、「風景」概念を考察する本稿の大きな手がかりとなった。
- 9 I. フランドロワ編『「アナル」とは何か』（藤原書店、2003）は、当初、ブローデルの影響をテーマに藤原書店と編者によって企画されたものであったが、13人の「証言」により、むしろ「批判的転回」以降の『アナル』の方向性がはっきり示されることになった。コルバンはその中で「新しい方法論、新しい対象」を担う一人として、インタビューされている。
- 10 フェーブル「いかにして往時の感情生活を再現するか」（1941）では、まさにこの他の学問領域からの「捕食」がいかになされるべきかが主題とされる（叢書『アナル 1929-2010（I）』藤原書店、2010所収）。
- 11 コルバンがこの点においてよく比較されるのが、イタリアのミクロストリア（ギンズブルグ）の手法である——これについては後述。尚、ル・ゴフもフランドロワのインタビューにおいて、この資料の範囲の拡大について『アナル』の方法論的貢献であったと指摘している（フランドロワ編、p.88）。

- 12 そのことはラジオ局における対談『風景と人間』（藤原書店、2002）で主題とされた。
- 13 「テレビ番組における風景の位相」においては、オギュスタン・ベルクから木岡伸夫『風景の論理』に継承されるロジックに依拠した。
- 14 コルバン自身は特に「生活」という語を強く意識してはいない。著作の中でも出現頻度はさほど多くない。しかし敢えてここで提示しておく意味は、後述する『記録を残さなかった男の歴史』の序章タイトルで「普通の生活についての研究」が掲げられ、そこに「大切なのは19世紀の社会史の手続きを逆転させることである」（p.11）の一文があるからである。すなわちコルバンは「社会」と「生活」を対置しているのである。
- 15 海岸に向けた外部者の眼差しが、その「定まりのなさ」「刹那を生きようとする意志」に向けられていたとする、第三章「透視画の中の登場人物たち」の描写がそれを語っている。
- 16 この「微視性」も、記号解釈の次元では、映像アーカイブへのアプローチとして重要である。「映像アーカイブ分析の方法—ミクロストリアの概念援用をめぐる覚書」『東海大学紀要文学部』第101輯、2014 参照。
- 17 そのあたりは「デジタルアーカイブと一次資料の「悩ましい関係」について」『大正イマジュリィ』第15号、2020で批判している。
- 18 Web規格の策定に関する1995年の討議（オハイオ州ダブリンで行われた）に由来する、15の基本要素によるメタデータ語彙の定義。2003年に国際標準（ISO15836）となったことで準拠の流れに加速度がついた
- 19 現在、水島研究室では、複数のコレクションを一つのメタ・アーカイブとして扱う実験を行っている（学前ローカルイメージラボ：2019年度東海大学連合後援会研究助成課題）。

引用文献

- A.コルバン『浜辺の誕生—海と人間の系譜学』福井和美訳、藤原書店、1992
- A.コルバン『記録を残さなかった男の歴史—ある木靴職人の世界 1798-1876』渡辺響子訳、藤原書店、1999
- A.コルバン『時間・欲望・恐怖—歴史学と感覚の人類学』小倉孝誠、野村正人、小倉和子訳、藤原書店、1993
- A.コルバン『風景と人間』小倉孝誠訳、藤原書店、2002
- M.フーコー『知の考古学』槇改康之訳、河出文庫、2012
- I.フランドロワ編『「アナール」とは何か』尾河直哉訳、藤原書店、2003
- L.フェーブル『歴史のための闘い』長谷川輝夫訳、平凡社ライブラリー、1995
- E.ル=ロワ=ラデュリ/A.ビュルギエール監修 『叢書アナール 1929-2010 (I)』浜名優美監訳、藤原書店、2010
- E.ル=ロワ=ラデュリ/A.ビュルギエール監修 『叢書アナール 1929-2010 (V)』浜名優美監訳、藤原書店、2017